



京都府知事

山田啓二さん

聞き手 梶本久夫 本誌編集発行人



心静まる環境との共生、 それこそが京都のUD

やまだ けいじ・京都府知事、全国知事会政権公約評価特別委員会委員長。1954年兵庫県生まれ。東京大学法学部卒業後、1977年自治省（現総務省）に入省。和歌山県地方課長、国際観光振興会サンフランシスコ観光宣伝事務所次長、高知県財政課長等で内外の地方自治を現場で体得するとともに、行政局行政課課長補佐、同理事官で地方分権の制度を担当。その後、法制局第一部参事官では政府の「憲法の番人」として、政府の憲法解釈の答弁づくりや法律解釈にあたり、1999年京都府総務部長として京都府に赴任。京都府副知事を経て、惚れ込んだ京都のために働きたいと京都府知事選に出馬、当選。

ません。同時に、伝統工芸などのものづくりが根付いています。京都は、かつては小学校をも町衆がつくったというほど絆の強い土地柄です。観光客にしても、単に神社仏閣があるというだけではこんなに多く訪れてはくれません。やはり京都ならではの心癒される雰囲気がある。ですから、私が主張する教育は、現場に合った人の力を生かせる学級・授業編成をする「京都式少人数教育」です。必要に応じてチームティーチング方式が必要になるし、さらに進んで進度別の細やかな指導なども必要になるでしょう。どういう形で先生と子ども、保護者が関係を持つのか、いちばん良い形を築くことこそ大切なのです。また、「子どもたちと地域の絆」も大切にしなければならぬと思っています。働く社会に対する子どもたちの意識が低くなっているように感じますから、社会体験の授業を積極的に取り入れたり、食育のために、古くから地域で食されていたものを給食で食べられるように「いただきます、地元産プラン」に取り組

んでいます。

そういうことから子どもたちが地域の良さを認識し、地域でがんばって働く人々によって自分たちが支えられているということが分かるようになる教育を目指しています。こうした教育によって京都らしさを体現できる人づくりを行いたいと思います。

21世紀型の新しい人間の絆づくりの鍵はUD

—サステナブルな社会づくりを考えると、高齢の方の出番も多くなるのではないのでしょうか。山田—そうですね。今、社会の問題点の多くは、人間同士の絆が希薄になつて起きていることに起因するところがあります。子どもたちが危ない事件に巻き込まれることが多くなっていますが、私たちは府内431の小学校区で「子ども・地域安全見守り隊」というのをつくりました。警察だけにまかせるとはなく、地域も一体となって安全を守

人と人との絆を復活させることで京都型のユニバーサルデザイン(UD)が活性化する

—知事の掲げられている《「人・間中心」の京都づくり・5つのビジョン》の中では、教育の存在も大きいですね。

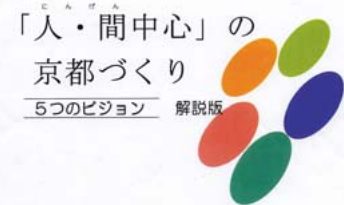
山田—人・間中心は政策の焦点を、府民におくこと。中でも、人と人との関係をもう一度見つめ直す政策をやつていきたいと考え、教育を重点のひとつにおきました。戦後60年の行政は、達成するために社会的なインフラを整え、社会保障の水準を向上させてきました。それがGDPでも世界有数の国になった現在、地域力という点からはかえって矛盾や限界が見え始めてきました。地域では小さな犯罪が増え、地域の力や人間力がだんだん落ちてきてしまったのではないかとこの危惧もあります。社会でも教育現場でも人と人との絆が薄れ、人間の力が十分に発揮できないのではという思いから、私たち行政は、それをもう一度しっかりと支え直さなければならぬ時期に来ていると思うのです。

現在、繁栄を謳歌している東京は環境に挑むがごとく高層建築が建ち並び、ものづくりというよりはマネーゲームなどの経済優先の社会の象徴になっています。それが悪いというわけではありませんが、それだけではいけない。日本人の持っているもうひとつの面があり、京都はそれを体現できると思うのです。京都は三方を山に囲まれ、真中に鴨川が流れています。1200年間にわたつてこの地域が続いてきたのは、環境と共生するサステナブルな社会だったからに他なりません。当初は4年くらいかけてできればと思いましたが、驚いたことに今年の7月末にすべての小学校区できてしまいました。3万人近いボランティアの方々が参加してくれていて、その中に高齢者の方が多いのです。高齢化社会には、セカンドライフを謳歌しながら地域の絆を取り戻そうとされている方が多いという面があり21世紀型の新しい人間の絆ができるのかもしれない。私はそうして生まれる新しい地域の連帯に、大いに期待しています。

もうひとつ、「健康長寿日本一を目指す」という目標も掲げています。医療体制を整備するだけではなく、生活の中でまず健康づくりをしなければなりませんから、やはり人と人との絆が大切になります。現在、地域の保健所を中心としてもう一度絆づくりをすることで、健康に対する新しいネットワークをつくらうとしていきます。例えば福知山では、「福知山音頭」を「健康づくり体操」として普及させたり、南丹や丹後では「元気づくり体操」をつくるなど、地道な運動に取り組んでいます。こうした取り組みのネットワークが広がることで、新しい地域連携社会になっていくと思っています。

—教育問題も高齢者問題も、人間の問題ですね。UDの取り組みについては、どうですか。

山田—UDについては、平成7年に制定した「京都福祉のまちづくり条例」に基づいてバリアフリー化を進めてきました。当時は、まだバリアフリーという考え方のほうが強かったですね。新京都府総合計画の中でもUDについては触れていますが、バリアフリーの考えを引き継いだ移動環



上：西本願寺の敷石
中：平等院の敷石
下：知恩院の木製スロープ

境の整備と製品づくりという商工観光的な視点でした。京都ならではの特長は、やはり観光地ですから拠点のバリアフリー化を懸命に進めているといったところでしょうか。神社仏閣は階段があつたりして、なかなか難しいのです。そこを何とかご理解いただいて、雰囲気壊さないようにして車いすが通れる敷石を敷いたり、スロープもできるだけ木製にしたりしています。竣工当初はまだ新しいですが、年月とともに周囲と馴染むようになってくれると思います。

今は、ソフト面のUDも進めています。京都は、京セラさんをはじめ、モバイルなどの通信系にとっても強い土地柄でもあります。携帯電話には、話す、見る、位置確認(GPS)という機能がありません。それらを活用して、まず外国人観光客向けのコールセンターを設け、外国語案内のインフォメーションや次に訪れたい観光地へのアクセス方法などを発信する実証実験を行いました。同様に車いすで移動するために最適なルートの検索など、障害を持つ方に対しても幅広く利用していただけるよう、ハードとソフト両面の整備を同時に進めることで、総合的なUDを進めつつあります。これからUDは、すべての人が暮らしやすくなるために施策の基本的な視点としていく必要があるでしょう。今度、国際会議が京都を会場に行われますから、それをひとつの起爆剤にしたいと考えており、今回、庁内組織を設け、施策をUDの視点でしっかりチェックしていこうと考えています。

計画は、5年、10年のように考えていては、つくった途端に担当者はもう終わったと思ってしまう、実際に5年後や10年後に携わっている人は府

る技術を組み合わせることを目的とした組織で、これができれば今のライフスタイルに合った伝統産業のUD化が可能になると思っています。

—UDの原則をつくった一人にドナルド・ノーマンという人がいます。『誰のためのデザインか』という著書があり、これがひとつの指針にもなっているといます。彼がいつている重要なことは、使い手側の求めていることをどう考えるか、ということだと思います。

山田—今までも「デザイン優品」として認定する制度を設けてきましたが、伝統産業はそれだけでは活性化しません。応用力はあると思いますから、もっとそれを生かしていければと思います。「京もの」自体の持つ技術水準の高さは、格段に高い。今までどう生かすかの意識が希薄だったところがありますから、それをきちんと見直し、積み上げていきたいと思っています。

—京都文化会議の中で「地球化時代」という言葉

庁の中にいないような事態が起こります。ですから、私は3年を基本として1年毎に見直ししていくアクションプランという方法をありとあらゆる施策の中に取り入れていきます。今年中に50を超えるでしょう。毎年12月までに計画を立て、予算に反映して実行し見直ししていきます。私が、就任した当初はどの部局も3月末に計画づくりを終える慣習がありました。それでは予算に反映されない。予算に反映されるのは翌々年度になり、計画が実行されるまで1年半のタイムラグができてしまうのです。それを計画から実行まで、3〜4ヶ月くらいにしようというのが、アクションプランです。今後は、このプランの中にUDの観点を入れるようにしていくことで、絵の具を溶かし込んでいくように動き出すことを期待しています。

バリアフリーとUDの違いは、強いていえば、バリアフリーはマイナス評価からの発想であるのに対し、UDはプラス評価で推し量る満足度評価であるといったところでしょうか。誰もが暮らしやすく住みやすい快適な街づくりや社会づくりをしていくためのものがUDだと理解しています。それは人と人との関わりの中で出てくるものですから、心の面がとても重要ですね。公共事業においても、従来のように単にものをつくるという発想から、今はどこにつくるのが最適か、それはなぜかといった細やかさが求められています。単に住民の方々の要望に応えるということではなく、細かいところに意識を浸透させないといけない。細かいたるところに意識を浸透させれば、府庁の1階には福祉作業所のパン売り場があります。作業所毎に種類も値段も違うもの

がありました。

山田—京都大学の当時の長尾眞総長と話をしていたときに「京都府と京大で京都らしい心の問題をやりたい」ということを話したのがきっかけで、民間から京セラの名誉会長の稲盛和夫さんにも入っていただき、京都には西田哲学などのベースもありますから、行政では捉えきれない「心の問題」を純粹に議論する場をつくりました。生命学的な脳の働きや倫理的なアプローチなど、ありとあらゆる方向から心の問題を考えたり、現代における平和の問題など、多角的に議論していきます。行政的な観点から直接効果が見えるものではないかもしれませんが、5年が過ぎ、京大はその成果を生かし、「心の研究所」をつくらうとされていますが、これはとてもうれしいことです。

9月には国が中心としてやっているSTSフォーラムがあります。科学技術と人類の未来を考えるための会議で、毎年京都で開催されています。これも科学技術を通しての心の問題です。各国から大臣や実業家、研究者などが集います。8

を日変わりで売ることにより、良い意味での競争も起こっています。また、障害を持つ方のITを活用した就労を支援するため、府庁においてITスキルアップ研修を行うなど、いろんな人が一緒になって仕事をすることで、互いに理解できるところです。また、府庁から発信したいと思

人と人、ものとももの、 技術と技術の絆で築く心に響くUD

—ものづくりにおける京都らしさはいかがでしょうか。

山田—京都の場合、産学公連携です。京都には15万人の学生さんがいて、人口あたりの大学数が日本一。これも絆です。ハイテクなどの最先端産業はもちろんです。一方で伝統産業分野でも協働を進めています。伝統産業の焼き物からセラミックが出て、京友禅の技術からICのプリント基板ができ、酒造メーカーからはバイオ技術が生まれています。伝統産業はライフスタイルの変化にもなつて変わってきますが、私はここにこそ、UDの発想が生かされなくてはならないと思っています。伝統産業が厳しい原因は、素晴らしいものであつても誰もが現代生活の中でうまく受け入れられなかったところにあると思っています。ですからそこにUDの発想が生かされれば、元々の自体が持っている力をいかに発揮できるかと考え、実際に伝統産業のインキュベーターシステムをつくり、ITと組み合わせることによつていくつものプロジェクトを試み始めています。「伝統産業協働バンク」は、相互に持っている

月には世界宗教者会議も開かれます。ものの本質や心の問題を考え議論するのは、京都でしかできません。今、サミットも誘致しています。京都には環境と共生し、東西の文化が融合され日本文化として昇華されている場所です。現代は文明衝突の時代でもありますから、日本から世界に向けてそれに対処するキーワードを発信するには、京都こそが相応しいと思っています。

—デンマークからおみえになった建築家が、成田から東京に向かう車中で「コンペイトウをばらまいたような街」という印象を受けたといいます。それが何度かいらして、自分のイメージがいちばん沸くのは竜安寺の石庭だとおっしゃいました。座っているだけでイメージが活性化します。彼にいわせれば、それこそがUDだと。例えばおじいちゃんの形見など、他の人にとっては何でもないものがその人にはとても力を与えてくれることがあります。そのようにUDは、「心に響くデザイン」だという解釈があります。ものがたくさんあるのではなく、心が満たされるということです。

山田—まさに京都は街づくりとしてそこを目指さなくてはなりません。いろんな面で東京化が進んでいますから、その中で京都であり続けるために、訴え続けなければなりません。それは、心静まる環境との共生のようなものです。京都で面白いのは、祇園祭にしても五山の送り火にしても、数十軒単位の家が脈々と守り続けていることです。このように住んでいる人たちの強い絆が生かされて、それが京都の環境を守り育てている。それこそが、京都のUDなのだと思っています。



上：竜安寺石庭
中：大文字の送り火
下：祇園祭